

第7回 ユネスコ「世界の記憶」 調査検討委員会開催とユネスコの動向

2019年2月12日(火)に、第7回「板東俘虜収容所関係資料」ユネスコ「世界の記憶」調査検討委員会が、鳴門市ドイツ館にて開催されました。議事は、申請書の変更点、申請資料の削除と追加、ユネスコの動向と今後の予定についての3項目でした。

申請資料の削除と追加に関して、資料整理の過程で検討した結果、3点の資料が申請対象から削除することとなりました。まず1点目は、講演会資料「ドイツの歴史と芸術の夕べ」(No. 281)と「中国の夕べ」(No. 283)で、これらが同一の講演会資料の続きであることが分かり、2点まとめて1点の資料として扱う必要があると判断しました。その他、写真資料「板東俘虜製作品展覧会にて7, 8」(No. 477, 478)の2点が、展示品リストや図面などと比較し、板東での展覧会ではないことが判明しました。

一方、追加資料については、新たに寄贈された資料等、「板東俘虜収容所関係資料」として貴重なものと判断されたことから、合計80点が承認されました。新たにペトラ・ボルナー氏から寄贈された資料では、板東にいた祖父のグスタフ・メラー氏が家族とやりとりした書簡や、写真、印刷製本、『ディ・バラック』等が挙げられました。

またユネスコ「世界の記憶」への登録申請に関して、当初は2018年の提出を目指していましたが、しかし、ユネスコは制度改革を終えるまで、申請の受付を中止しています。第7回調査検討委員会が開催された2019年2月当初、10月のユネスコ執行委員会の総会全体会合において、制度改革の方針が示されることが想定されました。ところが10月時点で、ユネスコは「世界の記憶」改革の目標であった2019年内の実現を断念し、再度検討を進めています。(長谷川)

第4回「板東俘虜収容所」関係資料 保存管理調査検討会開催と 『ドイツ館所蔵資料保存管理計画』の策定

2017年度より「板東俘虜収容所」関係資料保存管理調査

検討会を設置し『鳴門市ドイツ館所蔵資料保存管理計画』や、温湿度調査による設備改善、ドイツ館所蔵資料の保存分析調査について協議、検討してきました。

委員は以下の3名でした。

委員長：佐野千絵氏(国立文化財機構 東京文化財研究所、保存科学研究センター、センター長)

副委員長：園田直子氏(国立民族学博物館、教授)

委員：大林賢太郎氏(京都造形芸術大学、教授)

2019年3月19日(火)に開催された第4回目の検討会をもって、『鳴門市ドイツ館所蔵資料保存管理計画』を策定しました。計画期間は、2019年度から2028年度までの10年間、「板東の記憶を世界の記憶に―想いをつなぎ未来へ―」を基本理念とし、将来像を実現するために今後のドイツ館の計画と整備の方向性について示しました。本計画に則り、ユネスコ「世界の記憶」登録に向けて、板東俘虜収容所関係資料及び関連資料の保存と活用を進めていきたいと考えています。(長谷川)

京都文化博物館 別館ホール 「板東俘虜収容所」の世界展・所内演奏会の再現

2019年3月26日から31日にかけて、京都文化博物館別館ホール(京都市中京区)にて、『「板東俘虜収容所」の世界展―収容所生活を送るドイツ兵たちと見守る人びととの良き思い出の記憶―』と題し、徳島県とともに企画展を開催しました。主に「板東俘虜収容所」での史実、「板東俘虜収容所関係資料」の印刷物にみられるデザインの様相や文化の成果、地域の人々との交流について、パネル35枚と資料やレプリカ等約50点(内、徳島県立文書館資料2点)、PR動画上映により展示を行いました。来場者は2800名を超え、1日平均470名程となりました。初めて史実を知り、展示の資料を目にし、感動を伝えて下さる方が多く、なかには涙ぐまれる方もいました。

また3月30日(土)には、1919年3月26日に「板東俘虜収容所」で行われた所内演奏会「第7回室内楽の夕べ」再現コンサートを開催しました。京都市立芸術大学の学生や卒業生がベートーヴェンの「第7番 op. 30-2」等の曲目を演奏

し、100 年前に板東で演奏された音色が、大正期に建てられたホール（旧日本銀行京都支店：国指定重要文化財）に響き渡りました。（長谷川）



2019 年 3 月 30 日 京都文化博物館 別館ホール

エドアルド・ライポルト氏の資料寄附

4 月 22 日、元ドイツ兵捕虜エドアルド・ライポルト氏の親族であるミハエル・ゾッマー氏が来館し、1962（昭和 32）年に当時の大麻町からライポルト氏に送られたドイツ兵の慰霊碑や収容所兵舎が残る風景を収めた写真アルバムや新聞記事などが寄附されました。

今回、里帰りすることになったアルバムには、まだ開発が進んでいない元収容所跡地の姿や大麻比古神社、板東の街並みとともに、地元住民によるドイツ兵の慰霊碑前での慰霊祭の様子が収められていました。このアルバムは同時に送られた 8mm 映像とともに、ドイツ国内で開催された元捕虜の集まりで何度も披露されました。ドイツ兵の慰霊碑が板東の人びとによって守り続けられている事を、多くの元捕虜たちに伝える重要な資料です。（森）



ミハエル・ゾッマー氏による資料寄附

ドイツ橋・ドイツ兵の慰霊碑 建設 100 周年記念講演会・企画展

2019（令和元）年は、ドイツ橋とドイツ兵の慰霊碑が建設されてから 100 周年を迎える記念の年でした。これを記念し、ドイツ館では以下の講演会と企画展を開催しました。（森）

1. 講演会

①チンタオ戦俘虜の「事件」簿 5 月 18 日（土）

講師 チンタオ戦俘虜研究者・徳島日本ポルトガル協会理事
近藤文子氏



近藤文子氏講演会

近藤氏が学生時代から取り組まれてきた、チンタオ戦ドイツ兵捕虜研究の中から、捕虜たちの様々な「事件」を各収容所が所在した地域で収集した当時の新聞記事と歴史資料から紐解いてもらいました。福岡では日本人による捕虜の妻の殺害という悲しい「事件」があった一方、松山では捕虜を気づかい正月に雑煮が出されたが、餅が口に貼りつくため不人気だったという微笑ましい「事件」などが紹介されました。

②ドイツ人研究者から見た板東俘虜収容所 6 月 23 日（日）

講師 鳴門市国際交流員リリ・ブシュミン氏

鳴門市国際交流員として 3 年間勤務したりり・ブシュミン氏により、ドイツ人日本史学者の視点から見た板東俘虜収容所研究の現状が整理されました。そこから導きだされた今後の課題として、収容所内におけるアルコール依存症や同性愛、民族帰属および政治信念上の争いなどについて、詳細な研究が必要であるとの指摘がありました。

③ドイツ俘虜により大麻比古神社の杜の中に作られた公園

—公園・ドイツ橋・めがね橋が作られた経緯と意義について— 7 月 13 日（土）

講師 徳島大学大学院准教授 佐藤征弥氏

ドイツ橋と大麻比古神社境内に作られた公園について、前半は、板東俘虜収容所新聞『ディ・バラック』や神社に残された境内図などから、建設された経緯と意義について講演されました。後半は、神社境内に場所を移し、橋や園路が設置された場所をめぐるフィールドワークを実施しました。



佐藤征弥氏フィールドワーク

2. 企画展

①チンタオ戦俘虜の「事件」簿 4月27日～5月26日

近藤文子氏の講演に合わせ、氏が調査収集したドイツ兵捕虜たちの様々な「事件」から、彼らが収容所生活の中で、真剣に悩み、考え、行動した足跡を紹介した企画展を開催しました。

②写真展「舞台裏」第九アジア初演 100周年記念演奏会の軌跡 5月28日～6月23日

写真家小川直樹氏が平成30年5月27日から6月3日の鳴門市におけるベートーヴェン交響曲「第九番」アジア初演100周年記念事業の記録写真展を開催しました。小川氏が撮影した演奏会の舞台裏の状況や、参加者の交流の様子を収めた写真と、参加者の顔写真で構成されたベートーヴェンの肖像画のカラーズ写真の展示会を開催しました。期間中に、「なるとの第九 第38回ベートーヴェン「第九」交響曲演奏会」が開催されたことで、昨年の演奏会参加者が大勢詰めかけ、自分たちが写る写真を探し出していました。



小川直樹氏写真展

③捕虜が残した宝物ードイツ兵の慰霊碑が繋いだ過去と未来、ユネスコ「世界の記憶」への挑戦 7月29日～10月27日

8月31日に建設から100周年を迎えたドイツ兵の慰霊碑について、ドイツ兵捕虜たちがどのような思いで慰霊碑を建設し、お互いに接触がなかったにも関わらず、第二次世界大戦後にこの碑を守り続けてほしいという彼らの強い気持ちを受け止めた住民の存在が、板東俘虜収容所の記録資料をユネスコ「世界の記憶」への登録を目指す活動につながっている



「捕虜が残した宝物」展

ことを紹介した企画展を開催しました。(森)

④板東以前の捕虜収容所ードイツ兵捕虜が板東に来る前にいた収容所を見るー 12月5日～1月31日

板東俘虜収容所に統合あるいは転収された収容所の施設の様子や捕虜の生活と活動を中心に、板東以前と以後の相違や類似点を紹介した企画展を開催しました。

ドイツ兵捕虜に関する展示は地元ということもあり、当館ではどうしても板東俘虜収容所に関するものが多くなります。しかし板東のドイツ兵捕虜の大半は、約5年にわたる収容所生活のなかで2年以上を板東以外の場所で過していました。そこで、それらの収容所がどういうところで、どのような暮らしをし、活動していたのか、板東との関係や類似点、相違などが分るように写真や図版、地図などをパネル展示しました。一部印刷物と写真アルバムも実物展示しました。(川上)

国際交流員お別れの挨拶

リリ・ブシュミン

昨年7月に帰国し、ドイツ館から離れて以来、もう4ヵ月が経ちますが、まだよく愛情をこめて鳴門市で過ごした3年間を思い出します。国際交流員としてリュネーブルク市はじめドイツからの公式訪問客の通訳及びアテンド、ドイツ関係各所との連絡調整、ドイツ語講座の開講、各種公演やイベントへの参加、各所翻訳、ドイツ関連事業の企画・営業、ドイツ館内の案内などの幅広い業務を担当してきました。また、任期中は、多くの大型のイベントが実施され、「第九」アジア初演100周年にも取り組みました。

この3年間、鳴門市民または職場の同僚をはじめ大勢の方に大変お世話になりました。国際交流員として人と繋がる業務が多々ありましたので、私にとってまたとない意義ある仕事でした。鳴門市ドイツ館に就職が出来、皆様はその仕事を支えて下さったことに心より感謝しております。皆様のおかげで、数多くの素敵な思い出を作り、一生忘れないと思います。

また、板東俘虜収容所という基礎から、もう100年を超える日独交流が現在まで続くことが良く知られています。そこで、鳴門市は国際交流のサポートのためJETプログラムを通

じて国際交流員という形でドイツ人職員を任用しています。その国際交流員の皆さんが今までそれぞれの任期を延期したことは偶然ではないと思います。ドイツ人を常に大手を広げたまま迎えくださるので、特に鳴門の皆さんの暖かさのおかげで居心地が良いと感じられるからでしょう。ここ鳴門では、もう 100 年以上ドイツとの交流が活発に行われるのは、板東俘虜収容所があったけと中々言いえないと確信しております。板東俘虜収容所が契機となりながら、板東・鳴門の人々がその交流の担い手となります。ドイツ館という記念館があるからこそ、そういった史実が後世に伝わってゆき、ドイツとの繋がりがさらに深まる動機になります。ドイツからの団



体がくる度に、ドイツ人に「板東であった交流に感動しました」や「ドイツのことを皆さんがそんなに大事にしてくださって、嬉しいなあ」などという声がよく聞かれました。私も、少しだけでも、日本とドイツの架け橋となり、その類を見ない交流の援助をさせていただけたら、何よりも幸いです。皆様、また必ず鳴門に参りますので、これからもよろしくお願いいたします。

新国際交流員の着任挨拶

ダリオ・シュトラヒ

皆様、初めまして。昨年 8 月上旬に鳴門市ドイツ館に新規ドイツ人国際交流員として着任してまいりましたダリオ・シュトラヒと申します。

ドイツ統一後の 1992 年 2 月にベルリンに生まれました。都会から田舎へ、小学生の時にベルリンの郊外（ブランデンブルク州）にある小さな町に引っ越してきました。子供の頃から英語が好きで、学校では多言語を学ぶ楽しさを味わうことができました。地元の高等学校に在学している間、日本語音声で放送された日本映画を通じて、日本語や日本文化に興味を持つようになりました。独習で仮名や漢字の勉強に挑み、日本文化についてもより深く勉強したいと決意して、ベルリン・フンボルト大学に入学し、アジア学を専攻していきました。在学中は交換留学の機会に恵まれ、一年東海大学で留学することができました。初めての長期間外国滞在はとても魅力的で、日本のことがもっと好きになってきました。

その後、帰国してからはフンボルト大学所属のベルリン森鷗外記念館で研究助手として仕事をさせていただくことにな

りました。最初は明治時代の日本やドイツが別世界のように思われましたが、仕事をしている間、当時の様々な社会傾向や時代の流れなどもたいへん興味深く感じるようになりました。

フンボルト大学を卒業して、日本についての勉強を続けたいという気持ちでベルリン自由大学に入学し、日本学科を専攻しました。在学中は筑波大学での留学に恵まれ、当地では通訳や翻訳、ドイツ語講座アシスタントという異文化コミュニケーションに関わる仕事に触れることができまして、日独交流に携わる業務がますます挑戦し甲斐のある、もっと進んで歩みたい道となりつつありました。

こうして日独交流で広く知られている板東俘虜収容所に関する情報や資料を扱う鳴門市ドイツ館に仕事をさせていただくことをこの上ない光栄に存じます。また、自然豊かな、緑あふれる鳴門市で生活を送ることができまして、嬉しい気持ち限りなしです。徳島の名所へ足を運び、徳島や鳴門の伝統や風土、特産などについて色々体験してまいりたいと思います。

当時のドイツ人捕虜達と地元の日本人の間に生まれた交流などについて研究を進め、もっと多くの方々に板東俘虜収容所に広がってきた日独親善交流の物語を伝え、国際理解や国際交流の貢献になれば幸いと存じます。

まだまだわからないところも多いのですが、色々勉強してがんばりたいと思います。よろしくお願いいたします。



ドイツ兵の慰霊碑建設 100 周年記念事業

板東俘虜収容所の一角にドイツ兵の慰霊碑が建設され、完



献花式典の様子



献花式典での徳島少年少女合唱団による合唱

成式典が執り行われてから 100 周年となる令和元年 8 月 31 日に、これを記念した献花式を開催しました。

慰霊碑前で執り行われた式典には、大阪神戸ドイツ連邦共和国総領事館ウーヴェ・メアケッター首席領事をはじめ、ドイツ連邦共和国大使館国防武官室カーステン・キーゼヴェッター大佐、飯泉嘉門徳島県知事ら約 120 名が参列し、惜しくも収容所で亡くなったドイツ兵を慰霊するとともに、文化遺産として末永く守られることが祈念されました。



慰霊碑完成式典再現コンサート

午後からは、ドイツ館大会議室を会場とし、100 年前の慰霊碑完成式典を再現するコンサートを開催しました。徳島エンゲル楽団と徳島少年少女合唱団により、ベートーヴェンの賛歌「自然における神の栄光」、ワーグナーのオペラ「ローエングリン」から「祈り」、ロンベルクの「鐘」から「聖なる地の暗き懐より」が披露されました。徳島少年少女合唱団の清らかな歌声が響く中、会場を埋め尽くした来場者は 100 年前の完成式典の情景を思い浮かべながら聞き入っていました。(森)

第 25 回 ICOM (国際博物館会議) 京都大会 2019 の参加

鳴門市では、徳島県とともに ICOM (International Council of Museums: 国際博物館会議) 京都大会 (2019 年 9 月 1 日～7 日) に参加しました。

ICOM は、博物館の進歩発展を目的とした世界で唯一かつ最大の国際的非政府組織で、パリを本部に 1946 年に創設さ



ICOM 京都大会の会場 国立京都国際会館

れました。

現在では、138 国から約 44,500 名の博物館関係者が会員で、32 の国際委員会では、保存修復、民族学、考古学、自然科学など様々な分野ごとに、博物館・美術館の研究者や学芸員が活発に活動しています。3 年に一度 ICOM 大会を開催する中、第 25 回 ICOM 京都大会は、初めての日本での開催となりました。

ICOM 京都大会のテーマは、「文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ— (博物館定義の再考)」であり、基調講演やパネルディスカッションなど全体会議のほかに、国際委員会ごとのセッションや見学ツアーなどが実施されました。会場は、国立京都国際会館を主とし、その他、京都の博物館、美術館、文化施設等もサテライト会場となり、市内でも様々な市民向けのイベントも開催されました。参加登録者数は、過去最多の 4,500 名以上となりました。



ICOM 京都大会 国立京都国際会館
アネックスホール 展示ブース

徳島県と鳴門市は、「板東俘虜収容所関係資料」のユネスコ「世界の記憶」登録推進について、9 月 2 日 (月) から 4 日 (水) にかけて出展ブースを構え、第九プログラムのレプリカや解説タペストリーを展示し、PR を行いました。ICOM 博物館会議の参加は、当日券も即完売で会議参加者は限られており、多くは世界や全国から集まったユネスコ関係者を含む文化財の関係者でした。会場では、板東の歴史や資料についての解説文書、またユネスコ「世界の記憶」への PR の冊子をクリアファイルとともに配布し、解説を行いました。また謄写版印刷により、謄写版やドイツ館の説明冊子を手作りで作成し、配布しました。

期間中には、多くの関係者がブースに訪れ、資料保存のあり方や博物館の課題などについても話し合う機会を持つことができました。2日半と短い期間でありながら、板東の歴史や資料の重要性のPRを専門家に向け行い、「板東俘虜収容所関係資料」のユネスコ「世界の記憶」登録への一歩となる意義あるイベントでした。(長谷川)

松江豊壽所長の資料寄附

11月9日に鳴門教育大学で開催されたシンポジウム「松江豊壽が遺したもの」にパネリストとして参加した孫の松江行彦氏から、松江豊壽所長が所有していた資料4点の寄附がありました。いずれも絵はがきで、1点は板東俘虜収容所印刷所で謄写版印刷によって作られたもので、中央に割れた卵の殻と其の中に収容所を、その左右には鉢に植えられた梅の木を描いたものです。2点は松山から転収してきた捕虜が小松島港で下船したのち小松島駅前で出発を待つ様子(写真A)と、徳島市内を通過する様子を写真に収めたもの(写真B)で、表には「徳島立木製版」の文字があり、一般向けに製作販売されたものです。写真Aには、捕虜の足元に置かれたヴァイオリンケースが、写真Bには背負われたコントラバスが写っており、いくつかの楽器は捕虜自らが持ち込んだことがわかります。



写真A



写真B

最後の1点は、市販のはがきの裏面に、徳島市眉山町大滝山の茶屋「和田乃屋」で5人の捕虜が日本人と一緒に撮影した写真を印刷したものです(表: 写真C, 裏: 写真D)。撮影場所である大滝山とその周辺は、何人かの捕虜の夫人たちが仮住まいしていた場所でした。はがきの表(写真C)にはドイツ語で「記念のために

徳島 日本 ヤーコプ」と手書きされています。このヤーコプとは、丸亀俘虜収容所から板東俘虜収容所に転収となったヘルマン・ヤーコプであると考えられます。高知大学名誉教授瀬戸武彦氏の調査によると、ヤーコプは丸亀・板東両収容所でパウル・エンゲルが結成した「エンゲル・オーケストラ」の第2フルートを担当していました。

ヤーコプの履歴や撮影場所から、この写真は第一次世界大戦終結後の1919(大正8)年夏ごろに撮影され、捕虜から解放される前の記念として松江所長に送ったものと考えられます。



写真D

ドイツ兵捕虜たちは、捕虜から解放される前にビールジョッキやタンスなど様々な記念の品を自ら製作し、松江所長に贈呈しました。これは、無事に捕虜生活を過ごせたことへの感謝の意を表すと同時に、戦争により敵対する立場にあったにも関わらず、お互いの関係が良好であったことを証明する貴重な資料となっています。(森)



写真E: 当時の面影を残す、大滝山和田乃屋の店舗

ドイツ大使館・武官兼大佐が慰霊碑にて献花

11月24日、ドイツ連邦共和国大使館国防武官室カーステン・キーゼヴェッター大佐がドイツ兵慰霊碑で献花されました。ドイツ村公園で、鳴門市教育委員会安田修教育長が大佐と大佐の奥様を迎えて、献花式典に参加しました。2015年から続いている日独親善交流行事の一つで、第一次世界大戦の時に遠く離れた日本で亡くなったドイツ兵の慰霊、またそのドイツ兵の記憶を受け継ぐための行事です。ここ数年定期的に行われている式典に対して、大佐が「鳴門市と徳島県の関係者のおかげです」と感謝の意を表されました。大佐は8月31日に行われたドイツ兵慰霊碑建立100周年の記念式典にも参加され、約三か月ぶりの来鳴となりました。本式典は雨空であった8月の式典と違い、秋晴れの空の下で、厳粛に行われました。



献花するキーゼヴェッター大佐と安田教育長

また、大佐の大叔父にあたるユーリウス・パウル・キーゼヴェッター氏（Julius Paul Kiesewetter）は第一次世界大戦の時、中国の青島から捕虜として日本に連れてこられ、1914年12月3日に開所した大分俘虜収容所に収容されました。具体的な流れはいまだ不明ですが、1917年5月に病気のため亡くなりました。その内容は日本帝国俘虜情報局月報の1917年6月号と同年7月号で確認することができます。海兵であったキーゼヴェッター氏の葬儀の時の写真も残っており、また、ドイツ兵慰霊碑の隣に1976年に新しく建立された、日本全国で亡くなったドイツ兵の名前が刻まれている合同慰霊碑にその名前も「OITA」のところに含まれています。大佐は、本訪問について、次のように述べています。「関係者の皆様



キーゼヴェッター大佐と奥様

と一緒に、戦争で命を落とした者、とりわけ第一次世界大戦に青島の戦いで捕虜として板東俘虜収容所に収容され、亡くなったドイツ兵を供養することができて、大変光栄に存じます。また、曾祖父の弟も青島の戦いの後、大分俘虜収容所にて重病のため亡くなりましたので、本式典は私にとっても特別な意味がありました。」

献花式典が行われた後、森館長から大佐へ大叔父に関連する、ドイツ館などに保存されている資料集が渡されました。（シュトライヒ）

「板東俘虜収容所」関係資料の 徳島県指定有形文化財歴史資料への 追加指定について

ドイツ館が所蔵する「板東俘虜収容所」関係資料のうち、当時の写真や捕虜たちの書簡、大谷焼のビールジョッキなどの美術工芸品、捕虜の解放に関する証明書など304点が、令和元年10月8日に県指定文化財の追加指定を受けました。所内の印刷所でドイツ兵捕虜により製作された新聞・雑誌・コンサートプログラムなどの印刷物298点は、平成20年3月28日に徳島県指定有形文化財に指定されており、今回の追加指定により「板東俘虜収容所」関係資料数は602点となりました。

追加指定された資料の中には、収容所内外での捕虜たちの活動や、捕虜と日本人たちの交流の様子が分かる写真が多く含まれており、板東俘虜収容所における捕虜対応の実態を理解していく上でも重要な資料と言えます。（森）



徳島県立博物館 企画展示室 「板東俘虜収容所」の世界展

2019年12月12日（木）から2020年1月19日（日）まで、徳島県立博物館1階企画展示室で、『「板東俘虜収容所」の世界展—100年前の収容所に花開いたドイツ文化と日独交流の歴史—』を徳島県と共催で開催しました。2019年10月に徳島県指定有形文化財に追加指定された「板東俘虜収容所関係資料」を含め、多くの実物資料を中心とした特別展覧会となりました。

28日間の期間中に2,504名の方が来場、多くが徳島県在住の方々でした。アンケートには、地元素晴らしい歴史があったことを誇りに思うといった感想が寄せられました。



徳島県立博物館『『板東俘虜収容所』の世界展』

期間中は、12月と1月に展示解説や、1月13日にはガリ版作家の坂本秀童子氏によるガリ版刷り体験ワークショップを開催しました。ガリ版刷り体験ワークショップでは30名の方が参加し、「板東俘虜収容所」でドイツ人捕虜たちが用いた印刷技法を体験し、その難しさや手作りの楽しさを感じていました。(長谷川)



ガリ版刷り体験ワークショップ

所蔵品紹介 『第6中隊の影絵』

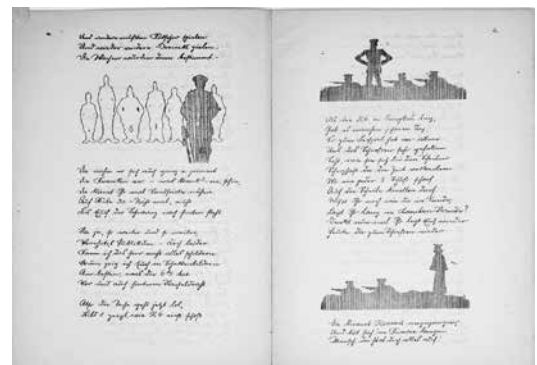
これはドイツ語の原題では "Die Schlagschatten aus der Vergangenheit der K.6 oder Gedankenblitze eines unheilbaren Stacheldrahtkranken" といい、直訳すると「第6中隊の過去の影絵あるいは不治の鉄条網病患者の思考の閃き」といういささか長ったらしいものです。

この「第6中隊」とは青島に駐留していた第3海兵大隊第6中隊のことで、この部隊はほとんどが現役兵ではなく、もともと東アジアにいて大戦勃発とともに召集されたり自発的に参戦した一般社会人で構成されていました。その中には宣教師もいれば大学教授もいる、商社員がいれば労働者や職人もいるという実に多様な職種の人々の集団でした。板東俘虜収容所でのさまざまな文化活動の中心になったのはこの人たちですが、ほかに収容所外への散歩や遠足のドイツ側の責任者だったブッターザックはこの中隊の指揮官でした。鉄条網病患者とは、鉄条網に囲まれた長期の収容所生活に耐えられず精神的に病んでしまった人を指します。

内容は登場人物が第6中隊に所属する兵士の演劇シナリオであり、第6中隊に関わる青島および松山での出来事を物語

りつつ仲間や収容所職員を辛辣また皮肉たっぷりに描いています。作者は自身もこの部隊に所属するカール・ベアー (Karl Bähr) で、1919年12月22日開催の第3海兵大隊第6中隊の「お別れの夕べ」で上演されました。そして翌1920年に収容所印刷所から出版されました。この作者はほかに詩画集『鉄条網の中の4年半』の詩も書いていますし、収容所新聞『ディ・バラッケ』の懸賞作文で一等賞を取ったりしていて、その文才を見せています。ちなみにベアーというと、板東で異例の1500部以上も出版された『3つの童話』の作者を思い起すのですが、こちらはエルンスト・ベアー (Ernst Behr) といい、兵士ではなく神戸在住の商社員でした。

このシナリオは本文35ページ、語数6000ほどの冊子ですが、松山俘虜収容所時代の市公会堂での暮しぶりや人物の描写があり、歴史的な資料としても公式記録には見られない具体性がある非常に興味をそそられるものです。現在ドイツ館史料研究会で翻訳を進めているところです。(川上)



ドイツ館史料研究会からのお知らせ

この第6中隊の人々が中心になって松山で出版されていた収容所新聞『ラーガーフォイアー』の翻訳作業が当研究会で進められて、すでに完了していますが、何しろ分量が多いため資金的に紙媒体での出版が容易ではありません。このたび井戸研究会会長の尽力により下記の書籍が愛媛新聞社から出版されました。内容的には松山のドイツ兵捕虜に関する全般的な解説に翻訳を一部取捨選択して掲載するものとなっています。

鳴門市ドイツ館史料研究会編著『松山のドイツ兵捕虜と収容所新聞「ラーガーフォイアー」』

愛媛新聞社 2019年 ¥3,080 (本体 ¥2,800)

❖ 今後の予定 ❖

ユネスコ「世界の記憶」登録推進事業 ベートーヴェン生誕250周年記念

2020年秋、高階秀爾先生(東京大学名誉教授、大原美術館館長)による「板東俘虜収容所関係資料」の美術史的側面に関する講演会を鳴門市ドイツ館で開催します。